

メインディッシュ

人生の終わりが近づいている。

死神という人間の作り出した存在が実在していれば、そいつの足音は確実に大きくなっている。私の鼓膜はリアルに音の振幅を感じ取っている。私はそれがすごく恐かった。

聞こえるはずのないサウンドをイメージで捕らえてしまっている。

私の想像力で生まれた、その黒装束に、私が怯えている。

その鎌を持った物体は私でもあるのに。

私はワタシに死の宣告を受けているみたいだ。

私と対峙するワタシ。

見つめ合う私とワタシ。

「マサオ！ 夕飯よ」

聞きなれた声に私は安堵した。母親の言葉が私を呼び戻した。食卓に着くと、いつもの茶碗とちよつと大盛りのご飯がよそられていた。納豆があり、干物があり、味噌汁がある。自家製のぬかづけも小鉢によそられている。もう一品欲しいところではあるが、これはこれでいい。普段と変わらぬお膳が、私を幸せな気分にした。

死神の気配はもう感じない。玄関の方から冷たい風が入ってきた。

父親が帰ってきたみたいだ。今日は久しぶりに「おかえり」といつてみよう。

父親が食卓に来るなり大声を上げた。

「お前は誰だ！」

その声に驚き、母親が台所から出てくる。私を見た瞬間、ギャーと猿のような悲鳴を上げた。私はどまどうことしか出来なかった。

気が違ったように父親と母親は騒ぎ始めた。

動けない私。

不意に目に入った、真つ暗なテレビ。

私の姿が映っている。

黒い布のような服に、ドクロのような顔面、背中に柄の長い大きな鎌を背負っていた。

私はワタシだった。

ワタシはそれを確認すると鎌を手に持ち、大きく振りかぶった。

人間の首が、胴体から切り離された。

干物の上に転がったそれは、今晚のメインディッシュのようだった。

ワタシが私の首を引き裂いた。その時からワタシは死神になった。

みんなその事をよく憶えていてくれ。

さらばだ。

あなたの中にいるワタシ。